

平成25年度病虫害発生予報第7号

平成25年8月22日
鳥取県病虫害防除所

予報の概要

区分	農作物名	病虫害名	発生時期	予想発生量
普通作物	イネ	いもち病(穂いもち)	—	やや多い
		紋枯病	—	やや多い
		トビイロウンカ	—	やや少ない
		斑点米カメムシ類	—	多い
果樹	ダイズ	紫斑病	平年並	平年並
		ハスモンヨトウ	—	やや多い
		カメムシ類	—	やや多い
果樹	ナシ	シンクイムシ類	平年並	やや多い
	共通	カメムシ類	—	平年並
野菜	キャベツ、ブロッコリー、イコ ^o	ハスモンヨトウ	平年並	やや多い
	ネギ、ナガイモ	シロイチモジヨトウ	平年並	やや多い

気象予報 (抜粋)

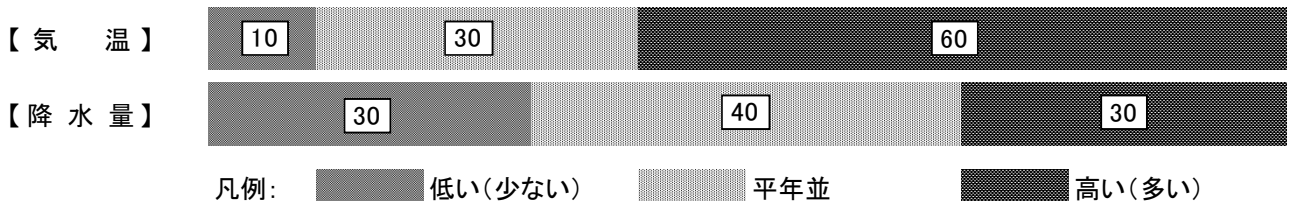
1か月予報 (8月17日～9月16日: 8月16日、広島地方气象台発表)

向こう1か月の出現の可能性が最も大きい天候と、特徴のある気温、降水量等の確率は以下のとおりです。

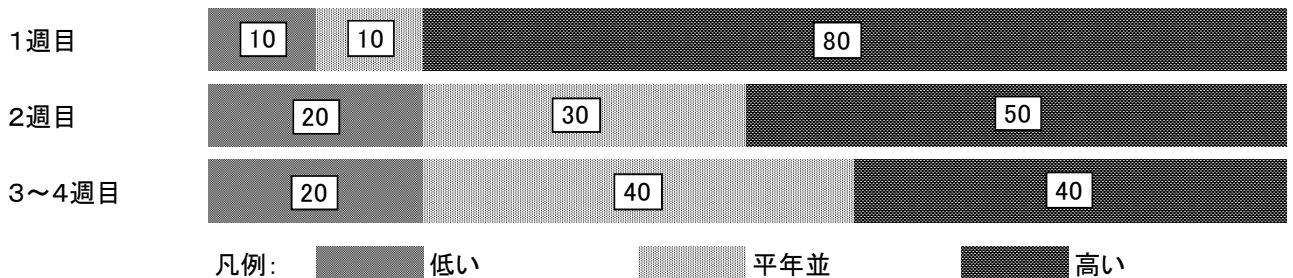
平年と同様に晴れの日が多いでしょう。

向こう1か月の平均気温は、高い確率60%です。週別の気温は、1週目は、高い確率80%です。

<向こう1か月の気温、降水量の各階級の確率(%)>



<気温経過の各階級の確率(%)>



普通作物

[イ ネ]

1 いもち病（穂いもち）（平成25年7月30日付、病虫害発生予察注意報第1号発表）

（1）予報の内容

発生地域 県内全域
発生量 やや多い

（2）予報の根拠

ア 7月下旬の調査では、葉いもちの発生ほ場率は26.0%と平年並（平年：27.6%）であったが、その後の天候が曇雨天で経過したため、8月6日現在の発生ほ場率は35.2%に増加した。また、山間部等の常発地および一部の平坦部においては、上位葉に急性病斑が認められるほ場や、多発ほ場が散見された。

イ 早生品種の出穂期前後が曇雨天で経過したため、穂いもちの感染に助長的であった。

（3）防除上注意すべき事項

病虫害発生予察注意報第1号を参照。

2 紋枯病

（1）予報の内容

発生地域 県内全域
発生量 やや多い

（2）予報の根拠

ア 8月21日現在、県予察ほ場（鳥取市橋本）における発生はやや多い。

イ 向こう1か月の気象予報から、発生量はやや多いと予想される。

（3）防除上注意すべき事項

病勢進展が衰えず、出穂後の防除が必要な場合には、病虫害防除指針などを参考に追加防除を行う。

3 トビイロウンカ

（1）予報の内容

発生地域 平坦部（特に沿岸部）
発生量 やや少ない

（2）予報の根拠

ア 8月中旬現在、一部のほ場において発生が確認されているが、発生程度は平年よりやや少ない。

イ 向こう1か月の気象予報から、発生量はやや少ないと予想される。

（3）防除上注意すべき事項

ア 本種の発生は、ほ場間差が大きいため、各ほ場における生息密度に注意する。特に、ウンカ類常発地において、は種前～移植期及び出穂前後の防除を行っていない中生品種栽培ほ場及び遅植えのほ場では、注意が必要である。

イ 防除適期は、幼虫発生最盛期の9月第2～3半旬頃と予想される。この時期の要防除水準（成幼虫数10頭/株）を超えたほ場では、病虫害防除指針などを参考に粉剤などで直ちに防除を行う。なお、散布の際、本種の生息場所である株元に薬剤がかかるように注意する。防除に当たっては、農薬使用基準を厳守する。

4 斑点米カメムシ類（平成25年7月30日付、病虫害発生予察注意報第2号発表）

（1）予報の内容

発生地域 県内全域
発生量 多い

（2）予報の根拠

8月中旬現在、現地ほ場における発生ほ場率は71.0%（平年：52.1%）、50回振りすくい取り虫数は5.6頭（平年：5.2頭）で、平年に比べて多い。

（3）防除上注意すべき事項

病虫害発生予察注意報第2号を参照。

[ダイズ]

1 紫斑病

（1）予報の内容

発生地域 県内全域
発生時期 平年並
発生量 平年並

（2）予報の根拠

ア 大豆の開花期は平年並である。

イ 向こう1か月の気象予報から、本病の発生は平年並と予想される。

（3）防除上注意すべき事項

ア 防除に水和剤を用いる場合は、開花期後25～35日に1回、アミスター20フロアブル2,000倍液（100L/10a）又は同剤3,000倍液（150～300L/10a）を散布する。なお、薬液には展着剤を加用する。

イ 防除に粉剤を用いる場合は、マネージトレボン粉剤DLを開花期後25～30日に1回散布する。

ウ 紫斑病とカメムシ類を同時防除する場合は、カメムシ類の項を参照する。

2 ハスモンヨトウ

（1）予報の内容

発生地域 県内全域
発生量 やや多い

（2）予報の根拠

ア 8月上旬現在、発生ほ場率は50.0%（平年値：37.3%）、1a当たりの平均白変か所数は0.2か所（平年値：0.3か所）で、平年よりやや多い発生であった。

イ 8月第3半旬現在、フェロモントラップによる誘殺数はやや多い。

ウ これまでの発生状況及び、向こう1か月の気象予報から、本種の発生はやや多いと予想される。

（3）防除上注意すべき事項

ア 若齢幼虫の加害によって発生する白変葉の早期発見に努め、発生初期の場合、葉の切除などによる捕殺を行うか、病虫害防除指針などを参考にして粉剤、水和剤のスポット散布を行う。

イ 防除の目安は、1a当たりの白変葉か所数3～5か所以上とする。なお、新葉の出葉により、白変葉が確認されにくいほ場が多いので、観察にあたっては、ほ場周辺からの観察のみならず、ほ場内での観察も行う。

ウ 若齢幼虫に対する登録農薬の効果は高いが、齢期が進むと防除効果が低下するため、防除適期を逸しないようにする。

3 カメモムシ類

(1) 予報の内容

発生地域 県内全域

発生量 やや多い

(2) 予報の根拠

ア 8月上旬現在、発生ほ場率は43.3%（平年値：40.5%）、25株当たり平均成幼虫数は0.8頭（平年値：0.9頭）で、平年並の発生であった。

イ 8月上旬現在、予察灯におけるイチモンジカメモムシ、アオクサカメモムシ及びホソヘリカメモムシの総誘殺数は平年並である。

ウ 向こう1か月の気象予報から、本種の発生はやや多いと予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 紫斑病に水和剤を使う場合

(ア) カメモムシ防除にネオニコチノイド系又はフェニルピラゾール系殺虫剤を使用する場合

- ・開花期後30～35日（全体の花が終わった時期）の1回防除を基本とし、紫斑病防除薬剤（アミスター20フロアブル2,000倍液）とカメモムシ防除剤（ダントツ水溶剤2,000倍液、スタークル顆粒水溶剤2,000倍液、又はキラップフロアブル2,000倍液）の混用で100㍺/10aの薬液を散布する。なお、展着剤を必ず加用する。

- ・カメモムシ類の発生が多い場合は、前回散布の10日後に、カメモムシ防除剤（水和剤あるいは粉剤）を散布する。

(イ) カメモムシ防除に上記以外の殺虫剤を使用する場合は、2回防除を基本とする。

- ・1回目：開花期後25～30日（全体の花が終わった時期）

紫斑病防除薬剤（アミスター20フロアブル3,000倍）とカメモムシ防除剤（エルサン乳剤1,000倍液、スミチオン乳剤

1,000倍液、トレボン乳剤1,000倍液等）の混用で、

150～300㍺/10aの薬液を散布する。なお、展着剤を必ず加用する。

- ・2回目：1回目防除の10日後

カメモムシ防除剤（水和剤あるいは粉剤）を散布する。

イ 紫斑病に粉剤を使う場合

- ・1回目：開花期後25～30日後

マネーヅトレボン粉剤DL

- ・2回目：1回目防除の10日後

トレボン粉剤DL、MR.ジョーカー粉剤DL等のカメモムシ防除剤を散布する。

果 樹

[ナ シ]

1 シンクイムシ類

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 やや多い

(2) 予報の根拠

ア 8月中旬現在、フェロモントラップにおけるシンクイムシ類成虫の誘殺数は、
平年並～やや多い。

イ 一部の地域でハウスナシの収穫果実にシンクイムシ類の被害がみられた。

ウ 現地の赤ナシ（無袋栽培）園でシンクイムシ類の被害が多い園がみられている。

エ 向こう1か月の気象予報から、ナシヒメシンクイの第3世代成虫（第4回成虫）の発生時期は、平年並の8月中旬～9月中旬頃と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア ナシヒメシンクイの発生盛期となる8月下旬～9月中旬の防除を徹底する。

イ 薬剤はアグロスリン水和剤2，000倍液、テルスターフロアブル3，000倍液、サムコルフロアブル10の5，000倍液、フェニックスフロアブル4，000倍液などを散布する。なお、薬剤の散布にあたっては、農薬の使用基準を遵守する。

[共通（ナシ、カキ、リンゴ）]

1 カメムシ類

(1) 予報の内容

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 8月中旬現在、チャバネアオカメムシの予察灯及び集合フェロモントラップにおける誘殺数は平年と比較してやや少ない～少ない。一方、クサギカメムシの予察灯における誘殺数は平年並～やや多い。

イ 8月中旬現在、県予察ほ場（北栄町、ナシ‘ゴールド二十世紀’、無袋）において、カメムシ類の果実被害は認められていない。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 被害や飛来状況は、ほ場間差が大きいいため、園内外をこまめに見回り早期発見に努め、被害果実やカメムシ類の発生が多い場合は早急に防除を行う。

イ 防除は、カメムシ類が飛来する夕方か早朝が効果的である。また、移動性が高いため、広域的な防除に努める。

ウ 薬剤は樹種ごとの防除暦を参考とする。

エ 樹種によっては収穫間近となっているので、農薬の使用基準を遵守する。

野菜

[キャベツ、ブロッコリー、イチゴ]

1 ハスモンヨトウ

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 やや多い

(2) 予報の根拠

ア 8月中旬現在、県予察ほ場（北栄町）及び現地ブロッコリーほ場におけるフェロモントラップ誘殺数は平年並である。

イ 向こう1か月の気象予報から、発生量はやや多いと予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 薬剤の防除効果が高い若齢幼虫期のうちに防除を行う。ほ場内をよく観察し、被害がみられた場合には直ちに防除を行う。
- イ キャベツでは、若齢幼虫期にアタブロン乳剤2, 000倍液、ノーモルト乳剤2, 000倍液などを散布する。中～老齢幼虫が見られる場合にはトルネードフロアブル2, 000倍液、プレオフロアブル1, 000倍液、マトリックフロアブル2, 000倍液などを散布する。
- ウ ブロッコリーでは、カスケード乳剤4, 000倍液、プレオフロアブル1, 000倍液などを散布する。
- エ イチゴでは、アタブロン乳剤2, 000倍液、マッチ乳剤3, 000倍液、フェニックス顆粒水和剤2, 000倍液、トルネードフロアブル2, 000倍液などを散布する。

[ネギ、ナガイモ]

1 シロイチモジヨトウ

(1) 予報の内容

発生時期	平年並
発生量	やや多い

(2) 予報の根拠

- ア 8月中旬現在、県予察ほ場（北栄町）及び現地ネギほ場におけるフェロモントラップ誘殺数はやや多い。
- イ 県予察ほ場において、幼虫による食害の発生は平年並である。
- ウ 現地ナガイモほ場において、幼虫による食害の発生はやや多い。
- エ 向こう1か月の気象予報から、発生量はやや多いと予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 幼虫が若齢の時期に防除を行う。この時期を逃すと防除が困難となる。
- イ ネギでは、プレオフロアブル1, 000倍液、トルネードフロアブル1, 000倍液、スピノエース顆粒水和剤5, 000倍液などを散布する。
- ウ ナガイモでは、デルフィン顆粒水和剤1, 000倍液などを散布する。

[おしらせ]

農薬の使用に当たっては、農薬使用基準を遵守するとともに、周辺への飛散には十分注意しましょう。

農薬の詳しい登録内容は、独立行政法人 農林水産消費安全技術センターの「農薬登録情報検索システム」から検索できます。(http://www.famic.go.jp/)

なお、農薬の使用や防除指導等に際しては、農薬のラベルを必ず御確認ください。

<鳥取県病虫害防除所ホームページ>

アドレス <http://www.jpnpn.ne.jp/tottori/>

病虫害発生予察情報、フェロモントラップ調査結果（ナシのシンクイムシ類）などの参考情報、病虫害の診断方法などの情報をお知らせしていますので、ご利用下さい。

<お問い合わせ>

普通作物関係：〒680-1142 鳥取市橋本 260

鳥取県病虫害防除所

(TEL：0857-53-1345、E-mail：boujyot@titan.ocn.ne.jp)

もしくは

鳥取県農林総合研究所農業試験場環境研究室

(TEL：0857-53-0721、FAX：0857-53-0723)

果樹・野菜・花き関係

〒689-2221 東伯郡北栄町由良宿 2048

鳥取県農林総合研究所園芸試験場環境研究室

(TEL：0858-37-4211、FAX：0858-37-4822)

※予報第8号の発表は、9月5日（木）の予定です。